The Society for Bioscience and Bioengineering, Japan

書評

「二酸化炭素問題 ウソとホント」

小島 紀徳 著

アグネ承風社（1994）

四六判 250頁 定価 2,266円

地球温暖化の原因物質の1つと考えられている炭酸ガスは，この地球環境形成にどのような役割を果し，かつ問題を生み出しているのだろうか．地球環境と公害問題を論じる場合，マスコミや出版社はえてして，焦点をしぼるために象徴的現象を特定の角度から観察することが多い．

本書の著者は，地球温暖化はなぜ起こるのかをその本質から説き明かそうとしている．もし炭酸ガスがなかったら，植物は生きていけず，今の地球環境は存在しえない．炭酸ガスは人類が火を初めて手に入れた時から放出し続けている物質でもある．炭酸ガスを出すなということは，エネルギーを使うなということである．このような現状を定量的に論じたうえで，科学的技術は炭酸ガス問題を解決できるのかと問題提起している．この問題が，実に我々の常識では理解できない多くの面をもっているため，原点に立ち戻って考え直す必要があると著者は強調している．

常識だと思われていることに，ウソ（間違い）がいくつもある．それらを克明にあばき，かつ著者の考えを明快に示している．地球環境・温暖化・エネルギー利用を総合的に考えようとする本書の構成は，

第1章 地球温暖化問題と対症療法，第2章 温室効果ガス放出量の削減と地球の炭素収支，第3章 地球のエネルギー問題と二酸化炭素の排出（一次エネルギー転換），第4章 省エネ・節エネ エネルギーの高効率利用（二次エネルギーシステム），第5章 エネルギー利用に伴って排出される二酸化炭素の回収・保存・利用技術，第6章 陸上植物による炭素固定とエネルギー，第7章 海洋の炭素循環と海洋を利用した二酸化炭素問題対策技術の評価，第8章 地球温暖化防止，二酸化炭素削減のための技術と政策・経済

本書のもう一つの特徴は，非常に多くの文献・資料に基づき，多くの第一線研究者との議論を通して得られた結論や問題点を定量的に述べている点にある．参考文献などは，もう少し細部にわたって検討するためのよい情報源となるだろう．本書は時宜を得た好書であると強く感じた．

（大阪大学工学部 今中忠行 記）

書評

「食品工業利用微生物データブック」

駒形 和男 監修

東京化学同人（1994）

B5判 290頁 8,200円（税込）

食品と微生物とのかかわりは古来からきわめて深い．いろいろな食品材料やその製造過程に，さまざまな微生物が働き，歴史的な，なかには芸術品ともいうべき発酵食品がつくられているし，近年には多くの食品工業関連の有用物質や酵素も生産されている．しかし，これまで食品にかかわるおびただしい数の微生物について，わかりやすくまとめたものはほとんどなかったと言ってよい．

今般，食品工業にかかわる有用微生物のデータブックとして本書が刊行されたことは，この分野の多くの関係者にとってまことに喜ばしいことである．本書の内容が，研究，教育，技術開発，文献調査など多くの分野において活発に利用されることは疑いないところである．記載事項は微生物の学名，文献記載名と和名，微生物の性質，製品と製品への用途，利用形態，微生物・酵素の作用，使用地域，文献であり，さらに補足的な説明が備考欄になされている．収載微生物欄の数は，細菌637，放線菌33，酵母203，糸状菌322，キノコ58，藻類36にものぼり，本書刊行のため，調査，執筆や編集に努力された関係者のご苦労がしのばれる．

収載された多くの情報を百科辞典的に使うこともできるだろうし，また世界の発酵食品の製造にどんな微生物が利用されているか，暇な時にページをくりながら眺めるのも楽しいことだろう．製品別一覧や微生物名—正名対照表，微生物名—採用学名対照表がつけられているのも便利である．今後の調査や研究の発展によって，将来さらに多くの有用な食品微生物がこのデータブックに追加収載されることを期待したい．そしてさらに，分類上の微生物の性質についての付加的な情報なども合せることにより，充実したデータベースとしての利用も考えられよう．

（関西大学工学部 土戸哲明 記）

NII-Electronic Library Service